

環境事始 二十三帖 研究室の風景

～ 吾亦紅と狸を惜しむ心 ～

加藤 龍夫著

半休先生の研究室、騒動ばかり関わっていたわけではない。春は花見、夏は花火、調査や講演では全国の温泉を廻った。職員は先生と花井だけメンバーは研究生、学生、留学生でその費用はすべて研究室持ちであった。先生は経営の才は皆無だから、財布は花井が握っていた。今度の旅行はこれだけあればいいでしょうとお札を手渡されて、どっちが親分子分か逆さまだった。記憶に残る遠足の有様を拾ってみる。日光から金精峠を越えて群馬県に抜けた。穂高温泉に着くと宿では予め囲炉裏に山女の串を並べて程よく炙って待っていた。大籠に十三種類の茸を盛った鍋料理。注目は北京生まれの姜さん。彼女らは文化大革命の惨状を舐めており、自然の味は初体験。さらに岩風呂に浸かって恐らく極楽の体験だったろう。今晚泊まりたいと言うからいいよと何人が残留した。彼女は六回も湯に浸かりすっかり膏が抜けてしまった。環境を見直す機縁となった筈。温泉といえば、戦争と戦後の困難で先生の世代遊興の日はなかった。車もなく海外旅行もなく土曜日もなく、カメラの趣味とホテル化してない秘湯だけがあった。考えれば労多く娯楽の少ない人生だった。こうして学生共先生の性癖に付き合わされて、群馬と島根と秋田の温泉はあら方廻る結果になった。先生の子供の頃の記憶に憧れは蒸気機関車の引っ張る旅行であった。だから成るべく調査は鉄道で行こうと計画する。しかし自動車産業の陰謀で列車本数を減らし、時刻表は乗り換え不可能に組んであるから、結局車で調査となる。我慢して高速道路を使う破目となった。道具を持っていれば車は必需品で仕方なかった。調査旅行が済んで大学に戻ればそこには自然が残っていて有難かった。ある日研究室の前に狸が倒れており、まだ息があるのでダンボールに保護した。見ていた事務の娘が襟巻にしたらと言い、ダニ研究の青木教授は肉を焼くと煙が凄いよと言って危険なので急いで病院に運んだ。結果骨折等外傷はなく餌不足の栄養失調、ビタミン剤を貰って帰ってきた。治療費は野生動物は只だった。先生は青木大人にくれぐれも食べないように懇願して調査に出掛けた。一週間後戻ると元気を回復した狸は箱を破って森に帰ったそうだ。キャンパスは元々ゴルフ場で、部屋の前の芝地には毎年吾亦紅が一株生えて心を和ませる。だが薄の叢に背高泡立草が侵入するので、引き抜いていると植生研究室の先生が見て、「無駄ですよ、生態学では放とけば無くなるものは自然に無くなります」と嗤う。半休先生はかかる半可通の手合いを嫌う。理屈はそうかも知れぬ。だが賤しくも環境で職を奉ずる以上、帰化植物、帰化動物は一本一匹でも排除する努力が必要と独り憤慨する。研究室の周りは当然照葉樹林と落葉樹林がある景観が望ましい。しかし十年も経つと楠の大木は切り払われて変哲もないビル群に変貌してしまった。同時に環境を守る精神も消え失せた。保存すべき守るべき豊かな自然が残る研究室で仕事ができるはずと思うのだが。記録によれば先生の研究室に在籍した学生

は約百人を数える。先生は彼らに環境研究の場を用意することに心を砕いた。その上で学生時代を楽しい青春の思い出として、社会に貢献してくれたら、それが教育機関の役割であろうかと今も思っている。環境を守る信念は山菜や山女を食べ、一匹の虫一羽の鳥の命を助けた生活経験によって身に付く、これは先生の研究室の方針だった。